爪隠しの魔術教師

萩知

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
爪隠しの魔術教師

【Ｎコード】
Ｎ６５５１Ｙ

【作者名】
萩知

【あらすじ】
魔術士と魔法具が中心となり活躍する世界。世界には合計３つの魔術学校が存在し、魔術士の育成に力を入れている。そんな中、世界で最も高い魔術士等級を持つ男、レイジェスが成り行きで魔術学校の教師として働くことになった。実力のある教師を求める生徒と他の国の注目を逸らすため、並の魔術士を装うレイジェスだが現実はそうあまくはなく――！？

1－1　新生活（前書き）

はじめまして。
処女作、初投稿です。
拙い文章ですが精進していきたいと思います。
ご意見ご感想歓迎です。
宜しくお願いいたします。
※底辺クオリティのため文章の細かい修正等頻繁にあります。

１－１　新生活

「ふぁあ……。もう朝か」

今日から新生活が始まるという緊張からか、いつもより格段に目覚めがいい。

この素晴らしい朝を祝して全裸で舞を披露しようか。そんなことを考えていると部屋のドアが来客を告げる。

コンコン

「ローザです。失礼致します」

ドアの向こう側の相手には、俺の部屋を自由に出入りする許可を与えているので間も無くドアが開かれる。

ガチャ……

「おはようございます。レイジ様」

声の主に視線を向けると、メイド服を着た銀髪の女性がそこにいた。美しい容姿を持つその女性の動きは、歩き方からお辞儀の１つまでを見ても、完成された芸術を彷彿とさせる。

「おう、おはよー、ローザ。

この家……と言っても学校の研究室数部屋を改造したものだが慣れたか？

欲しい物や問題があったら、なんでも言ってくれていいからな」

長年一緒に暮らしている同居人に、一昨日引っ越してきたこの新居のことを聞いてみた。学校の敷地中心部にある教師用の研究室棟を建物ごと買い取り、大胆な改造を施したものだ。

「はい、今のところは特に問題はありません」

「そっか。急な作業だったから少し不安だったが、ローザが言うなら本当に問題はなさそうだな」

ローザは控えめなところはあるが、俺の尋ねることに嘘は絶対つかない。あまりにも変なことを聞くと無視されるけどね。

「んじゃ、顔でも洗ってくるから飯の用意を頼む。あ、今日は紳士的な気分なんだよねー。飲み物もそんな感じでお願い」

俺はその日の気分で朝の飲み物を変える。今日は優雅な朝の一時を心にゆとりを持って、全身全霊で味わいたい気分なのだ。第三者が聞けば、意味のわからない注文としか思わないだろう。というか、第三者どころが正直俺にも意味がわからない。しかし、一切の迷いもなくローザは、自然な笑みを浮かべて答えてくれる。

「わかりました、レイジ様」

感情のこもった俺を呼ぶローザの声が心地よい。
そんな毎朝繰り返される何気ないやり取りに1日の始まりを実感する。

「さてっと」

軽く体を伸ばし気合を入れる。
今日はいつものようにのんびりはしていられない。俺の新しい勤務先であるユライト魔術総合学校の学校長に挨拶へ行かねばならないのだ。
ローザと食事までの短い別れを惜しみつつ、洗面所に移動する。そこで顔を直接手で豪快かつ繊細に洗う。豪快かつ繊細という素人には難しい洗顔手法だが、俺くらいになれば朝飯前だ。まあ結果として、俺の衣服と周囲は水浸しになった気もするが、繊細な洗顔テクニックにより俺の顔は3割増しでスッキリだ。仕上げに横に掛けてあったタオルで顔を拭き、下げていた頭を上げる。すると、洗面台に備え付きの鏡に、20半ばくらいの黒髪オールバックのいかつい兄ちゃんが映っていた。

「うわぁぁぁぁ！　なんだこのワイルドダンディは！」

――って俺じゃん。
まったく朝から心臓に悪いな。自身すら一瞬で虜にしてしまう己のダンディズムが恐ろしい。
ちなみにワイルドダンディとは俺が考えた自身の理想像である。一見すると、野生的な男らしさを感じさせるちょっぴり危険な感じ。でも、言動一つ一つを注視してみると実はとっても紳士的。それがワイルドダンディだ。
気を取り直し、歯ブラシを片手にしたところで、3日ほど前に会った古い友人とのことが脳裏によぎる。しっかし、まさか俺が学校の教師をやることになるとはな。世の中わからないものだ。
ふと過去を思い返す。
訳あって叶えたい願いがあった。当時5歳だった俺は、その願いを叶える為に魔術を学ぶことを決めた。少しでも魔術に関わることならば、なりふり構わず食いつき、知識と技術を身につけていった。

そして、魔術の知識を求めて世界を巡り、心身ともに随分と成長した後、気付いてしまった。いかなる魔術を使っても、――否、魔術を含め、いかなるものを用いても自身の願いが叶わぬことに。失った命、家族――母、父、姉はもう戻らないことに膨大な魔術の知識を得たことで理解してしまった。

そうして完成したのは、魔術の知識と技術を持った空っぽの１人の人間だった。事情があって２０代にしか見えないが、実際は今年３６になるおっさんだ。特に何かをする気力も起きず、適当に毎日を怠惰で過ごしていた。そんな生活をしていると、各国を転々としていた時に知り合った古い友人に、先日声を掛けられたわけだ。

『魔術学校の教師にならないか？』

と。

必死に２０年以上魔術を身に付けてきただけあり、魔術には自信があった。今までやってきたことを少しでも役立てることができるなら、それもいいかもしれない。そう思い、俺は友人の誘いを受けた。まあ、実際のところは教師になることで、学校に展示されている古代の魔法具を自由に研究できると言われたことが、大きな要因だったということもなくはないかもしれない。昔から魔術を研究していたためか、今では魔術関連の研究が俺の趣味になっているのだ。俺の頭の中は、今や生徒に魔術を教えることではなく、古代の魔法具の研究が占めていることはいうまでもない……。

「レイジ様、食事の用意ができました」

「おーい、レイジー、早くー！」

「お腹すいた。早くしないとなくなる……かも？」

背後から聞こえたローザの声に我に返った俺は、ローザ同様に昔からの同居人である2人の居間から発せられたであろう声に返事をする。

「おう、今行くから待っててくれー」

急ぎ洗面所での残作業を終え、俺は食卓へ向かうことにした。

……

食事を終えた俺は、自室に戻り着替えを開始する。

学内では、教師も生徒も服装に規定はないらしい。とはいっても、防具着用は魔術士にとって当たり前のことだ。規定にはなくても、魔術の心得がある者ならば、まず防具を身に着けているだろう。実際には、高い練度の強化魔術があれば、どのような服でも十分相手の攻撃を防ぐことはできる。それこそ極端に言えば、実力があれば全裸でも問題ない。そう、全裸でも問題ないのだ。だが、0から10に強化するよりも、3から10に強化するほうが当然楽だし、使う魔力量も少なく済む。それに全裸でも攻撃は防げても、痛いものを見る周囲の視線からは逃れられないのが悲しい現実だ。故に防具は魔術士の必需品である。

「よし、こんなもんかな」

お気に入りの防具に着替え、鏡の前に立つ。灰色のシャツとズボンをタイトな感じで着こなし、その上から長めのレザーコートを着込んだダンディズム溢れる大人のスタイルだ。

鏡の中にいるイケメンに向かって呟き、ついでにウィンクをしてみる。鏡の中のイケメンも俺に向かってウィンクを返してくれた。

まさに以心伝心……。うーむ、トレビアーン。
３０分ほど鏡の中のイケメンと見詰め合い言葉を交わしていると、鏡の中のイケメンの背後に銀髪メイドが現れた。瞬間、俺は鏡の中のイケメンに叫び掛ける。

「な！？　どういうことだ！　その隣のメイドはなんだ！　俺と2人で世界にワイルドダンディズムを広めようと約束したじゃないか！
あの約束は嘘だったのか！？　俺はお前のことを――」

「レイジ様。そろそろ出発しなければ遅刻してしまいます」

「あ、はい。今行きます」

背後から聞こえたローザの忠告に俺は大人しく従うことにした。遅刻うんぬんより、俺の行動を戒めにやってきたのだろう。ローザの無表情が怖い。ローザは基本的に俺の味方なのだが、時々こうして俺の行動や言動を遠まわしに注意することがある。我が家には、九分九厘俺に問題がある場合に限ることだという噂も流れているが、俺は認めていないことだ。

「それじゃ、行って来るなー」

玄関で同居人達へ旅立ちを告げ俺は我が家を出る。目指すは校長室だ。

1―2　少女と精霊

時刻は午前7時。
研究室改め我が家を出て10分ほど経った頃だろうか。
「これはあれだな。……迷った」
誰もいない空間で1人呟く。
学内は中心部に魔術関連の施設や各種教室棟、各種商店が集まり、中心部から外れるほど寄宿舎や宿屋などの宿泊施設が多くなる。
我が家は比較的学内の中心部に近いところにあるので、今回の目的である校長室はそこまで遠くないはずなのだが……。
こんなことならローザを連れてくればよかった。
特に連れていけない理由もなかったのに、謎のダンディズム理論を振りかざしてローザの付き添いを拒否してしまった気がする。

世界三大国家の1つ、ユライト王国にある国内唯一の魔術学校が俺の勤務先となる。
魔術学校は専用の施設の造設や、専門の教師を集めることが困難という理由から、世界三大国家それぞれに1つずつ、合計3つしか世界に存在しない。
なので、他の魔術学校を持たない国から魔術を学ぶため、毎年大量の生徒が入学してくるらしい。
生徒の数が増えれば必然的に学校も大きくしなければならないわけで、現在はとんでもない規模の学校となっている。
学校の敷地内だけで建物の数が3桁じゃ収まらないほどだ。
生徒数は1学年大体5000人程度。
学校は6年制なので単純計算で全校生徒数は3万人ってところか。
教師の数は正規で1000人前後、臨時の教師も合わせると13

００人を超えるらしい。
その他にも、学内で商売を行う商人や料理人、施設の護衛兵や管理人、生徒や教師の従者など相当数の人が住み込みで働いているため、学校は１つの小国家規模の敷地と人口になっている。
今日から俺もその中の１人に入るわけだ。
うまくやっていければいいなー。

そんなことを考えながらひたすら知らない道を突き進んでいると、心地良い緑が広がるテラスのような場所に出た。
白い円形のテーブルとそれを囲む４つの椅子のセット、三人掛けのベンチが適度に広いスペースに散りばめられている。
うーむ。実に素晴らしいテラスだ。
何より椅子とテーブル、ベンチ、植木鉢の間隔が絶妙じゃないか。
思春期の少年少女のパーソナルスペースを維持しつつも、互いにコミュニケーションをとるには差し支えのない距離間隔。
このテラスを考えた巧みの手腕を認めざるを得ないな。
９５点……といったところか。
ちなみに、学校内地図があれば１００点だった。
実におしい。
非常に残念だ。
残念すぎる……。
とりあえずテラスを評価してみたが、迷子という現状は変わらなかった。

そんな時、不意に俺の耳に小さな歌声が響いた。
恐らく軽く口ずさんだ程度なのだろう。
女性と思われる歌声はとても弱かったが、澄んだ美しい声をしていた。
小さな歌声を頼りに音の発生源へと俺は辿り着く。
黒髪の小柄な少女が、テラスの外れに１つだけある三人掛けのベ

ンチに腰を掛けて歌っていた。
少女の隣には、何か強い魔力を感じさせる黒い影が見える。

あれは……精霊か。
それも上級精霊だな。

精霊を召還する魔術は、ユライト王国と並ぶ世界三大国家、シラキナ帝国の初代皇帝の血を引くものが使う固有魔術だ。
固有魔術とは、特定の種族の血や遺伝を持つものだけが使える魔術で、訓練をいくら積もうが絶対に他の人間には使うことができない魔術である。
必然的に黒髪の少女はシラキナ帝国の皇族か、それに近い人間だということがわかる。
シラキナ帝国には魔術学校があるので、わざわざシラキナ帝国ではなくユライト王国の魔術学校に来るというのは珍しい。
それが皇族関係者なら珍しいどころではない。
何か事情があるのだろうな……。
歌声が聞こえなくなったところで俺は少女に近づき声を掛ける。

「御機嫌よう、お嬢さん。お隣に座ってもよろしいですかな？」

可憐な少女を怖がらせまいと紳士的に声を掛けてみたが、反応はほとんどない。
ふむ、志向を変えてみるか。

「あー！　ひっさしぶりー！　元気してたー？　え？　私だよ、私ー。覚えてない？
ほら、前世で恋人だった犬のナベリウスだよ！
いつ転生したのー？　まじ、会いたかったんだからぁ！」

ふふふ、さすがに前世の恋人から声を掛けられれば無視はできまい。
もちろん俺に前世の記憶はない。
だが、可能性としては0じゃないので一概には嘘ともいえないはずだ。

「……何か用ですか？」

呆れたような警戒しているような表情をしている。
しかし、少女が口を開いてくれたことだけでも進展だ。
少女の凍りついた心が、凄い勢いで溶けている実感がある。
だが、まだ喜ぶのは早い。
ここからは、さらに慎重に言葉を選んでいかねばなるまい。
思春期の少女の心は繊細なのだ。
頭をフル回転させ、少女の問いに答える。

「僕と踊ってくれませんか？」

我ながら完璧な選択だ。
踊りを通して緊張感をほぐし、心を通わせることで互いを本能的に理解する。
こうして仲良くなった俺は一言少女に言うのさ。

『道を教えてください』

とね。

「嫌……です」

少女の口から出たのは意外な言葉だった。
隠されている真意を考える。
そして、活性化した俺の脳はすぐに解を導き出した。
「なるほど！　そういうことか。
もう俺達は友達、そういう解釈であってるかな？」
「意味がわからないです。……何が目的なんですか？」
なかなか警戒心が強い少女の言葉に俺はコンマ０秒で答える。
「あなたと友達になることが目的です」
「私にはあなたと友達になる理由がないです」
コンマ０秒で返された。
手強いな。
だが、俺は障害が多いほど燃える性質なのである。
時間が多少掛かってもあきらめるつもりはない。
俺がやる気に燃えていると、今度は少女が自身の言葉を補足するように続ける。
「……それに私にはクロもいます。あなたは怖くないんですか？」
隣にいる黒い精霊の名前だろう。
空中に浮いている球体状の不自然な影が、禍々しい魔力を放っている。
触ると怪我をしそうな他を寄せ付けない感じがクールだ。
正直ちょっと妬ける。

「クロというと君の隣にいる精霊かな。なら、ちょうどよかった。君の隣の精霊とも友達になりたかったんだよね。
俺の今日のラッキーカラーは黒なんだ。運命を感じるよね。よろしくクリちゃん」

「クロです」

少女が訂正する。
精霊は契約者との念話でしか話すことができないので、何か言葉を口にすることはない。

「おっと失礼、クリちゃん。
ところで、お嬢さん。恐縮なのだけど、校長室はどこか教えていただけないかな」

ふと時計を見た俺は約束の時間を大幅に過ぎていることに気付いてしまったのだ。
今日のところは負けを認めざるを得ない状況となっている。

「え？　……もしかして道に迷っていたんですか？
校長室ならそこの道を真っ直ぐ行った先にある建物の最上階、階段を登って3部屋目ですけど。
それと、この子の名前はクロです」

「おお！　ありがとう！　持つべきものはやっぱり友達だな！
助かった！　時間が本気でやばいから、もう行かないとだ」

本気でやばい。
初日からこの遅刻は果てしなくまずい気がする。

「いつから友達になったんですか、もう。
いいから早く行ってください」
出会ってから初めて少女が笑った。
口元が軽く緩んだ程度だったが、作っていない自然なものだ。
「おう、すまんね。
あ、ちなみに道に迷って声を掛けたのは事実だけど、友達になりたいと思ったのも本当だから。
今回は俺の負けだが、次は負けん。じゃあな、お嬢さん、クリちゃん！」
捨て台詞を吐いて、少女の教えてくれた道を駆け抜ける。
道を聞くだけのつもりだったのに、少女の悲しそうな表情を見ていたら完全に趣旨が変わっていた。
余計なお世話だと思われても、たまにこうしてスイッチが入ってしまう。
魔術を教えるのも教師の仕事だが、一番重要なのは生徒の力になることだよな、うん。
なんだか教師になることが無性に楽しみになってきた。
約束の時間になっても現れない俺を校長室で待ってるであろう友人に、教師への道を与えてくれたことを感謝した。

1—3　古き友人

やって参りました校長室。
正確には校長室前だけど。

部屋の中には人の気配がする。
気配から察するに人数は1人だな。
ということは、間違いなく部屋内には俺の古い友人であり、同時にこの魔術学校の校長でもある奴がいる。
問題は今が約束の時間を1時間ほど過ぎていることだ。
絶対怒ってるな……。
怒り狂った友人の姿が目に浮かぶ。
このまま部屋に入って奴の怒りに触れるのも嫌なので、先ほど考えた策を実行しよう。
深呼吸をして校長室の扉をノックする姿勢をとる。
失敗は許されない、頑張れ俺。

コンコンコココココン　コンコン
コンコンコココココン　コンコン

「イエァ！」

コンコンコンコンコンコンコン
コココココ　ココココ
ココ　ガチャ……

「——で、レイジよ。何をやっているのかね？」
演奏の途中で向こう側から扉を開けられた。

ここからが盛り上がるところだったというのに。
まったく、空気の読めない友人だ。
「いや、あれだよ。癒しのリズムを奏でて、ラージェの疲れきった心を癒してあげようかなーってね？」
あわよくば、怒りも一緒に消え去っていただこうかなーってね？
俺の手にかかれば扉も立派な打楽器となる。
その技術を使ってラージェの心を平常に戻すことを目標とした完璧な策だ。
「レイジ。何か言い残すことはあるかい？」
「……ごめんなさい」
紳士たるもの言い訳はしない。
俺は誠意を込めて謝った。

校長室に入って1時間は地獄だった。
思い出したくないので、忘れたことにした。
過去に囚われるのはよくないからな。
「それでは色々あったが、気を取り直して。
我がユライト魔術総合学校へようこそ、レイジ。歓迎するよ」
「ああ、こちらこそ宜しく頼む、ラージェ」
ラージェは今年ピチピチの32歳になる真紅の髪の女性だ。
洗練された肉体は、強化魔術を使わない状態でも、男性を圧倒で

きる力を秘めている。
人間頭サイズの甲殻果物であるセリクをデコピンで粉砕するほどだ。
昔、ラージェにセリクを食べるから割ってくれと頼んだことがあるが、その際デコピン一発で粉状に砕かれたのが懐かしい。
近いうちに誰かの頭もデコピンで粉砕するんじゃないかと俺は予想している。

「さて、積もる話しもあるだろうけど、さっそく学内のシステムとレイジの待遇について説明をさせてもらうよ。
先日渡した資料にはちゃんと目を通したかい？」

「おう、大体頭に入ってるはずだぞ」

「それはよかった。なら話しは早い。
うちの学校では教師の魔術士等級に応じて、権限や義務といった待遇が変わってくることは知ってるだろう？
レイジは特級魔術士の資格を持ってるから、本来ならば最高の待遇が与えられるわけだよ。しかしね、特級魔術士の稀少価値を知らないとは言わないだろう？
私としては構わないのだがね。特級魔術士が我が学び舎に来たと校内の者が知れれば、レイジにとっての教師生活がそれはそれは面白いことになるだろうね」

ククッっとラージェは笑い声をこぼした。

魔術士等級は全世界共通の資格だ。
１年に１度各国のお偉いさん達が試験官として一同に集まり、公平に魔術士等級の昇級試験を全世界の希望者に対し行う。
初級、下級、中級、上級、最上級、特級と６段階あり、特級魔術

士は全世界に１７人しかいない。
ユライト王国には４人、ユライト魔術総合学校長のラージェ、ユライト国ギルド長のガードン、そしてジェントルマン代表の俺だ。
あと１人は頭に名前が出てこないので、まぁ今はいいだろう。
ユライト魔術学校では、校長のラージェを除くと上級魔術士等級の教師が最高だ。
学校の授業は単位制で、卒業に必要な最低限の科目は存在するが、基本的には各教師が行っている魔術の講義や実技といった授業から、生徒が自由に選択し学ぶことができるのが特徴である。
生徒は魔術を学ぶために学校へ来ているため、より魔術の扱いがうまい人に教えを請うのが道理だ。
教えるのが上手い下手はあるかもしれないが、生徒にとって魔術士等級は、魔術の扱いのレベルを知るための最もわかりやすい基準となる。
そんな中、特級魔術士として教師になれば、俺が受け持つ生徒の数が尋常ではないことになり、地獄の教師生活を送ることになるとラージェは遠回しに言っているんだろう。
通常ならば、魔術等級が高いとはいっても、魔術という膨大な学問の中にあるいくつか特定の技能がその基準を満たしているというだけなので、例え学内最高等級である最上級魔術士の教師でも、生徒の学びたい技能と教師の持つ技能が一致している必要があるため、教師の授業に出る生徒数はかなり絞れる。
具体的な例を挙げると、治癒術が優れていることから最上級魔術士になれた教師に、炎属性の魔術や剣術を学ぼうだなんて生徒はまずいないということだ。
しかし、特級魔術士になると話が変わってくる。
最上級魔術士の教師がユライト魔術学校内に８０人前後いるのに対し、特級魔術士の教師は０である。
この差からもわかるように、特級魔術士等級の資格はありえないほどハードルが高い。

ハードルが高いということは、それだけ最上級魔術士と特級魔術士の実力に差があるということになる。
その差に惹かれて生徒が集まることが予想されるわけだ。
実際に全ての魔術士の基礎となる強化魔術や分析魔術だけみても、特級魔術士は相当レベルが高い。

続けてラージェが口を開く。

「そこで提案なのだがね。まずは中級魔術士として魔術教師生活を送ってみないかい？
幸い、君は名前こそ謎の特級魔術士としてかなり有名だけど、顔はほとんど知られていないからね。
いずれかはバレるにしても、魔術教師としては新米の君に特級魔術士の名は辛いと思うよ？」

「助かる。それで頼むわ」

異論もないので、すぐに了承の返事をする。
ひたすら魔術を研究をしていたため、表にあまり顔を出していなかったのが吉と出たな。
俺が特級魔術士等級の試験を受けたのは２７年前、９歳の時なので当時の姿を知っているものが学内にいても、俺と結びつけるのは無理だろう。

「わかった。なら中級魔術士として手配しておくよ。
本名をそのまま使うと正体を隠すこともできないから、偽名で登録する必要があるね。
レイジというあだ名をそのまま使っても違和感はないし、名前はレイジでいいね。家名は適当に付けておくから資料ができたら確認しておいてくれよ。

後は、専門とする能力とクラスだね。授業をできる程度の知識や術技は何がある？　私はレイジの魔術をほとんど見たことがないからね。
　魔術に関わることだけでなく、特定の武器を使った近接格闘技術、戦術などの知識でも大丈夫だよ」
　授業ができる程度の知識や術技か。
　魔術に関しては、知らないことのが少ないんじゃないか？
　まあ、正直に話しておいたほうがいいだろう。
「んー。魔術に関することなら、一通り研究したからなんでもいけるな。
　格闘技術は素手と剣術ならそれなりに自信があるぞ。
　クラスもそういうことで本当は魔闘士と言いたいところだけど、魔法士にしておいてくれ。特級魔術士等級は魔法士の術技で取得したからな」
「ん？　一通りとは？　クラスに関してはわかったけど、もう少し具体的に教えてくれると助かるよ。
　要望はあっても担当できる教師がいないために、生徒に教えることができない授業もかなりの数あるからね。
　こちらとしても、できる限り多くの生徒に望むものを学ばせてあげたいんだよ。そういうことで、各教師の持っている能力は極力把握するようにしているんだ。
　口で説明しずらいものがあるなら、あとで書類にまとめて提出してくれてもいいよ？」
　本当に言葉通りの意味だったんだけどな。
　うまく伝わらなかったようだ。
　俺はもう１度、今度は少し具体的に説明し直す。

「魔術関連なら本当になんでも大丈夫だ。
５大属性はもちろん、光術、闇術、呪術、結界術、治癒術、召喚術、……少なくとも三大国家のいずれかで聞くことができる魔術の知識なら、わからないことは恐らくないな。
あ、さすがに固有魔術はなしだぞ。あれは努力でどうこうなるものではないからな」

数秒の静寂が訪れた。
ラージェが口を半開きにしてこちらを見ている。
俺も対抗して口を半開きにしてラージェを見ることにした。

「……規格外とはこういうことを言うんだね。
知識だけでなく、実際に術技として使うこともできるのかい？」
沈黙を破り、信じらないといった様子でラージェが尋ねてきた。
俺の必死の抵抗は無視されたようだ。
なんかここまで驚かれると、自分の言っていることが本当なのか自分自身に問い掛けたくなってくる。
おい、俺、本当に使えるんだよな？

「もちろん実際に使えるぞ」

答えながら、自分自身でも確認のため魔術を使う。
５大属性に光術を加えた６種類の魔術を使って、１面ごとに違う属性色に染めたサイコロを掌の上に作り転がした。
魔術を使えることを再確認した俺はさらに補足する。

「どの魔術かにもよるが、上級魔術レベルから最上級魔術レベルの術技は扱える魔術が大多数を占めているな。ちなみに、苦手な魔術

でも中級魔術レベルの術技は使えるぞ。得意なものは当たり前だが特級魔術レベルだ。
　あと、術技に関しては得意不得意で多少ばらつきはあっても、知識はどの魔術に対しても特級魔術士レベルのものはあると思うなー」

　またしても静寂。
　先ほどとは違い、ラージェはこちらを見ずに何か考えるようにして、やや視線を下に向けている。
　とりあえず俺は口を半開きにしてラージェを見る作業に戻る。

「そうか、わかった……。
　学校長としてはありがたいことだけど、私個人としては複雑な気持ちだよ。
　こんな仕事をしているからたくさんの魔術士を見てきているが、私の記憶にある限りは6種類の魔術を扱える魔術士が最高だったよ。それも、多くの魔術を扱おうとしたため、1つ1つの練度が低く、下級魔術程度のものしか使えない魔術士だったけどね。
　レイジを見ていると、私が本当に同じ特級魔術士なのかわからなくなりそうだよ」

　ラージェが肩を落として俺の方を見る。
　俺はそんなラージェに対し、少し真面目に返すことにした。

「別に魔術を多く使えるからなんだって話しだけどな。
　それに少なくとも10年前に俺がラージェに言った『お前と戦ったら無事では済まなそうだからやめとおくよ』という言葉は心底そう思ったから出たものだ。
　俺はあれからもひたすら魔術の研究を行い、ラージェはあれからすぐにこの学校の校長に就任した。もしお互いの実力に差が出たとしたらそこだろうな。

例え学校の運営が忙しくて己を磨く暇がなかったとしても、それもラージェが選んだ選択だろう。僻むのはなんか違うんじゃないのか」

意外そうな表情を浮かべたかと思えば、ラージェは突然声を上げて笑い始めた。

何事かと、こちらから声を掛けようとしたところで、ラージェが先に口を開いた。

「いや、すまない。気を悪くしないでくれ。

レイジがあまりにもらしくないことを言うものだからついおかしくてね。いや、らしくなかったのは私だね。ありがとう。

全くもってレイジの言う通りだよ。私が自分で選んだ道を否定してどうするんだろうね。魔術士としての自分を心のどこかでまだ捨てきれていなかったみたいだよ。

私は魔術士ではなく、このユライト魔術総合学校の校長として学校の運営に力を注いだ。１人でも多くの魔術を学びたいという人に魔術を教えられることを目標にね。

それは今も変わらないし、これからも同様だ。

目標が違えば成長のベクトルも違う、そんなこと当たり前なのにね」

先ほどまでの暗い雰囲気は微塵もなく、普段の５割増しの明るさでラージェは続けて言葉を紡ぐ。

「それでは話を戻そうか。

レイジの魔術のレベルの高さについてはよくわかったよ。

こちら側から頼みたい授業があったら、随時相談しに行くことにしよう。

それと、来週から実際に授業をしてもらう予定だから行いたい授

業のタイトルを決めて、その概要を書類で明日中に提出してくれると助かるよ。細かい資料は明日の朝にもレイジの家に届けられると思う。
もし、明日までに書類を提出するのが難しいようなら、資料の提出期限と1回目の授業を来月に遅らせることも可能だから早めに言ってくれるとありがたいね。
話しは以上だよ。何か質問はあるかい？」
質問しようにも明日の朝までに届くという資料を見ないとなんとも言えないよな。
とりあえずは問題もなさそうだし、帰って授業のことでも考えるかなー。
授業は来週といっても、2日後にまで迫っているからな。
「特にないな。後々わからないことがあったら機会を伺って聞きにくることにするさ。
それじゃあ、腹も減ったしそろそろ帰るわ。
色々本当ありがとな。近々食事でもしようぜ。またなー」
「あぁ、それではまた」
俺は校長室を後に帰路に就いた。

1－4　同居人

校長室を後にした俺は、今度は迷うことなく我が家まで帰ることに成功した。
途中、数人の生徒とすれ違ったが、教師の顔などいちいち覚えていないのだろう、教師として新しく就任する俺を注視するような生徒もいなかった。
最上級魔術士の教師の姿や名前なら、ほとんどの生徒の頭に記憶されているんだろうな。
いいないいなー。
俺はこう見えて目立ちたがり屋なのだ。
同時に面倒くさがりだけどね。
俺は特急魔術士だと主張して注目されたい衝動に駆られたが我慢した。

ガチャ…

「ただいまー」

「お帰りなさいませ、レイジ様」

玄関でローザが出迎えてくれた。
奥からは昼食だろう香ばしい香りが漂ってくる。
いつ帰るのか伝えていなかったはずなのにこの対応だ。
将来良いお嫁さんになるに違いない。

「どうしました？」

感慨にふけて固まっていた俺を心配して、ローザが声を掛けてく

れた。

「いや、ローザもいつかお嫁にいってしまうと考えると、嬉しいような悲しいような複雑な気持ちになってな。

くそ、歳をとると涙腺が緩んでいかんな。ちくしょうめっ！」

「安心してください。

この先、何十年、何百年経とうとレイジ様がこの世界に生き続ける限り、私はレイジ様のお側を離れることなく付き従い続けますよ」

さも当たり前のようにそう言うと、さぁご飯にしましょうと、ローザは奥に去って行った。

第三者が聞けば愛の告白と捉えるかもしれない。

だが、ローザの言う『付き従う』という言葉がポイントだ。

ローザの場合は文字通り付いて従うことしか考えていない。

1種の愛とも呼べるのかもしれないが、ローザのそれは保護者であり雇い主であり、同時に命の恩人である俺への強すぎる忠誠心からきている。

ローザも今年で19歳、そろそろ自立して自分の幸せを見つけてもらいたいと考え、たまに自由をほのめかすことを言ってるのだが、結果は毎回同じようなものだ。

今のような冗談まじりの軽いノリでの発言にも、妙に迫力のある声できっぱり否定の意を返してくる。

そこで、毎回俺が気迫に負けて黙るか、話題を変えて逃げるというのがいつものパターンだ。

だって怖いんだもん……。

さて、今日の昼食は何かなー。

6人は座れるであろう少し広めのテーブルに座り、既に席に着いていた正面にいる先客2人に話し掛ける。

「よお、ブルー、フィー」

「よっ、レイジ。早かったじゃん」

「お帰り、レイジ」

ブルーとフィーが順番に挨拶を返してくれる。

髪は兄妹揃って、ローザの銀髪に薄い青を混ぜたような色をしている。

ブルーは13歳、フィーは12歳、2人は兄妹だ。

兄のブルーは、ヤンチャという言葉がしっくりくる少年だ。

涙を腕で拭った後、八重歯を浮かべた笑みで『へへっ』っと言うコンテストがあれば優勝できるだろう容姿と性格をしている。

妹のフィーは、居るだけで周囲の人に癒しを与える小動物系少女だ。

気が利く優しい性格で、小動物系故に知らないおじさんについて行きそうな容姿と無垢な雰囲気を身に纏っているが、実際は兄のブルーよりしっかりしている。

「新しい我が家はどうだ？
食堂に武具屋、魔法具屋、薬品屋、……思いつく限りは学内になんでも揃ってるしクリちゃんもいる。
研究室棟をまるごと買い取るのに費用はかかったけど、おかげでこの広さだ。
学内ということでリスクもいくつかはあるかもしれんが、それ以上にメリットがいっぱいだ。クリちゃんもいるしな」

「ここの住み心地は悪くないぞ。

今までの宿屋生活とは違って、他の人間が同じ建物内にいないのがいいな」

ブルーが答えた。

さり気なく話にクリちゃんというキーワードを入れたのに、クリちゃんのことは触れられなかった。

おっかしいなー。

あまりに自然な流れで気付かなかったのかな？

もうちょい強調してみるか。

「それはよかった。クリちゃ……おっと失礼、フィーも特に問題はないか？

後で、さっクリちゃ……じゃなかった、さっくり校内を見てきたらどうだ？　どうせまだ出歩いていないんだろう？　校内は色々あって面白かったぞ。

俺もクリちゃんに会ってもうびっクリックリ」

ちょっと、おかしな感じになった気もするが、なかなか上出来だ。

「うん、あたしもここは好きになれそう。

むしろ、今までで最高の環境と言っても過言じゃないかも。

理由は色々だけど、本当の意味で我が家と呼べることが大きいかな。開放感や安心感があって不思議な気持ち。

今後はずっとここにいたいな？」

フィーはいつもの純真無垢を思わせる表情と口調で答えてくれた。

しかし、俺の求めた回答とはちょっと違う。

ブルーもフィーもクリちゃんについて、なぜ触れてこない！

俺はお茶を人数分食卓に運んでくれたローザに、さりげなく矛先を変える。

「ああ、この先引っ越す予定はとりあえずないな。
建物も完全に俺の所有物となっているから、どんどん住みやすい環境に改造しちゃって構わないぞ。
そうそう、話は変わるがローザ、クリちゃんって知ってる？」

もう直球を投げることにした。

「さあ、レイジ様、ブルー、フィー、食事にしましょう。
今日はレイジ様の就職祝いですので、腕によりをかけて作ったんですよ」

「うまそー！　よっしゃー、食うぜー！」

「ん、ローザの料理は相変わらず美味しい」

「ふふふ、ありがとう、フィー。
レイジ様も早く召し上がってください」

とても微笑ましい光景に涙が出てきそうだ。
決してクリちゃんについて無視されたことで泣きそうなわけではない。
断じてない。

「よし、お前ら！
このジェントルマンレイジが食事がさらに美味しく、そして楽しくなるようにありがたい話をしてやろう！
皆気になってしょうがないだから、特別に教えてやるが、クリちゃ――」

「まだ諦めてなかったのかよ！」

「往生際が悪い……」

「ふふふ」

ブルーが叫び、フィーが呟き、ローザが笑う。
それぞれが違う反応、違う表情をしているが、食卓はとても温かい空気に包まれる。

今でこそ、本当の家族のような関係だが、ここまでくるのは大変だった。
兄妹2人との出会いは8年前になる。
魔術の研究のため、とある小さな国に来ていた時のことだ。
飢えのために行ったらしい初めての盗みがばれて、衛兵達と揉めていた2人を、俺が拉致監禁したのがきっかけだ。
両親には幼い頃に捨てられたという兄妹を前に、突発性友達募集症候群に発症した俺は、強引にブルーとフィーの友達になった。
さすがに鬼畜の俺でも友達のピンチを見逃せないので、衣食住の面倒やら戦闘術など、生きていくのに使える技術と知識を教え込んでいった。
そうこうしてるうちに、今の状況になったというわけだ。
人生は何があるかわからない。

「ご馳走様。今日のご飯も上手かったぞローザ」

楽しい食事の一時も終わり、俺は自室へ戻った。

1―5　秘め事

教師生活2日目。
といっても初日はラージェと待遇について少し話しただけなので、まだ教師としての実感はない。
ラージェの宣言通り、今朝何枚かの資料が届いた。
内容は大まかに分けて3種類。

1．契約書類：3枚（『ユライト魔術総合学校教師就任承諾書』、『ユライト魔術総合学校移任承諾書』、『中級魔術士教師契約書』）
2．薄い冊子：2冊（『魔術教師の心得』、『授業を行うにあたり』）
3．授業申請書（教師用）：2枚（『専門科目授業申請書』、『共通科目授業申請書』）

がある。

契約書類を一通り読み、魔力印を押す。
重要な契約書には基本的に魔術が使われ、それに魔力印を押すことで契約は成される。
魔力印とは本人にしか使うことができない魔法具で、自分だけの意思では決して取り消すことができない名前入りの特殊な印を押すことができる。
契約を破ったら死ぬとかそういうことはないが、契約書類の印の色が変わり、契約を破られた人間に感知される。
結果として、内容にもよるが契約を破れば書類を証拠に牢獄にぶち込まれるのがほとんどだ。
今回の契約で特に注意すべきは、教師の立場から得られた生徒の個人情報を意図的に外部に漏らすなってことくらいかな。

そのほかにも色々契約内容はあるが、要は学校側に不利益な行動を取れば一方的に解雇することがありますってことだ。
紳士な俺には無用な心配だな。

次に薄い冊子をぱらぱらと軽く捲ってみる。
授業申請書を書くにあたり必要そうな部分だけをとりあえず確認するか。

…………ふむ。

魔術士等級によって、扱える授業科目の種類に違いがあるのか。
手元にある授業申請書2枚に目を落とす。
中級魔術士では専門科目と共通科目の授業を行うことができるということか。
専門科目は各種の術技や知識の世界共通資格を取得することを最終目標とした授業を行うらしい。
対して、共通科目はまったく縛りのない自由な事柄を取り扱う科目とのことだ。
それぞれ実際にあるらしい例が資料に書いてある。

専門科目：初級剣術、中級治癒光術、最上級魔法具生成（装飾品）
共通科目：対弓術の心得、ユライト王国の歴史、楽しいゲル料理教室

なるほど。
専門科目は世界共通の魔術関連の資格の名前がそのまま授業名になっている。
資格を狙っている生徒を対象とした授業で、人気のある資格はいくつも重複した授業が存在するのが特徴らしい。
まあ、教える教師が違えば学べる知識も変わってくるだろうしな。

本当に資格が欲しい場合、その資格に関わるそれぞれ別の教師が行う授業を全て受けるのも珍しいことではなさそうだ。

ちなみに、授業にしっかり参加していれば、最終的に資格取得試験に落ちて資格を取得できなかったとしても単位はもらえるらしい。

共通科目はフリーダムの一言に尽きる。

他の科目の場合は、生徒が毎月初日に1ヵ月分の授業申請を行い、申請を行った授業に欠席せずに参加することで単位をもらうという流れになっている。

だが、共通科目だけは生徒が特に授業申請を行う必要がなく、自分の空いている時間に開かれている共通科目の授業を自由に受けることができるのが特徴とある。

単位の取得も共通科目だけは特殊で1回ごとにあるとのことだ。

それにしても共通科目の紹介に書いてあるゲル料理ってなんだ。

ローザに聞いてみたい気もするが、『これがゲル料理です』などと言って実際に食卓に出されたら、俺は正気ではいられないかもしれない。

触らぬ神になんとやらだ。

ゲル料理のことはそっと胸の奥にしまっておこう。

専門科目に関しては、資料にまじっていたラージェのメモに『魔術縫合の授業を頼みたい』と一言書いてあったので、深く考えることもなく決まった。

残るは共通科目だが、実はある程度決まっている。

やっぱり自分の1番得意なことを教えるに限るよな。

俺は1人部屋で授業申請書を書く作業を始めた。

校長室。

先ほど書いた契約書類と授業申請書をラージェに提出して3分経過した頃か。

「うむ。問題はなさそうだね」
俺の書いた書類数枚の確認作業が終わったらしい。
口の端を軽く釣り上げラージェは口を開く。
「――ただ、この共通科目の授業申請書に書いてある『アグレッシブ　ワイルドダンディズム　オーラ』と『ジェントルエスコート』というのは本気なのかい？
後者はなんとなくどんなことをするのか想像できなくもないけど、前者は想像力乏しい私にはまったくわからないよ」
「ああ、『アグレッシブ　ワイルドダンディズム　オーラ』は、俺が独自に編み出したオリジナルの戦闘用魔術だからな。わからなくても無理はないぞ」
「魔術の授業だということすらわからなかったよ……。先に言っておくけど、1ヶ月間通して授業の参加生徒が1人もいなかったら、その授業は廃止となるからね」
どうやらラージェはダンディズムの素晴らしさと需要の多さを理解していないらしい。
可哀想なやつだ。
「大丈夫さ。
女のラージェにはわからないかもしれないが、男なら誰でも1度はダンディズムを志すものだ。
来年にはこの学校の男子生徒は全員黒が似合うダンディになっていることだろう」

「それならいいんだけどね……。まぁ、頑張ってくれよ」

ラージェが哀れみを浮かべたような表情で俺を見て言った。

この瞬間俺は誓う、『本当に哀れなのは私だった』と近々ラージェに気付かせてやろうと。

数秒の間を空けて、ラージェが思い出したように声を上げる。

「そうだ。これを渡しておこう」

そう言ってラージェは、引き出しから2枚のカードを取り出し俺に手渡してきた。

「身分証明用のカードか」

2枚のカードを受け取り呟く。

1枚は俺の本名が書かれたカード、もう1枚は偽名が書かれたカードだ。

2枚のカードには名前のほかに『ユライト魔術総合学校　教師中級魔術士：魔法士』と書かれている。

「偽名の方は学校内で、本名の方は学外で教師としての身分を証明したい時に使って欲しい。

一応正式なものだからね。さすがに、学外で偽りのある身分証を使えば罪になってしまうよ」

「なるほど、だから2枚か。

しかし、校内だからといって、正式な身分証に偽名を使っていいものなのか？」

身分証に偽りがあることがばれて、発行者であるラージェにまで

迷惑が掛かるようなことがあれば、俺も目覚めが悪い。
「心配はいらないよ。
特級魔術士の待遇の1つとして、学内では偽名を使うことが許されているからね。
まぁ、ばれて騒ぎになった場合はレイジには特級魔術士として改めて表に出てきてもらうことになるけどね」
無用の心配だったようだ。
俺はラージェの言葉にそうかと頷く。
お互いの用件も済み、軽く雑談した後、俺は校長室を後にした。

いつかの精霊使いの少女に会ったテラスを経由して、我が家へ帰ることにする。
校長室とテラスと我が家は、互いを線で結ぶと三角形になる。
なので、テラスを経由するのはあきらかに遠回りだ。
そう思い今日の朝、我が家から校長室に向かう際、直線距離を行こうと努力したが結局迷子になったのはいい思い出となっている。
「うむ、やはりこのテラスは素晴らしい！」
テラスに着いた俺は、ベンチに座って叫ぶ。
叫ぶだけでは、この想いを表現するには足りないので歌にすることにした。

「びっくり　ざっくり　くりっくり
ゆっくり　じっくり　くりっくりー
しゃっ――」

「やめてください！　何を考えてるんですか」

突然の声に俺の熱いソウルが妨げられる。

声の方を見ると、黒髪の精霊使いクリちゃんが隣に座っていた。

「うお！　クリちゃんじゃないか。

びっくりしたー。いつから座ってたんだ？」

驚愕を表す俺の声に、超不機嫌そうにクリちゃんが答える。

「私がこのベンチに座っていたら、突然あなたが隣に座って歌い始めたんです！

私を目視してからベンチに座ったじゃないですか、絶対に！

それに今あきらかに私に対してクリちゃんと呼びましたよね？

私の名前はリースです。訳の分からない名前で呼ばないでくださいー！！」

以前に比べて随分印象が違う。

こんな公共の場で大声をだすような子じゃなかったのに……。

まったくけしからん。

「まぁ、落ちつくんだクリちゃん。

レディがあまり大きな声で叫ぶものじゃないぞ」

「誰のせいだと思ってるんですか……。

それで、こんなところに何か用ですか？

今日は休日なので授業の帰りというわけでもないですよね。

あとリースです。クロを連れていませんし、間違いようがないですよね」

声のボリュームを下げてクリちゃんが言う。
どうやら自分でも、声が大きかったことを自覚しているんだろう。
「実は昨日から教師になったんだよねー。今日は色々書類の提出ついでにこれをもらってきた。いいだろいいだろー」
俺は先ほどラージェからもらった身分証を1枚取り出し、クリちゃんに見せつけた。
ここで重要なのは、見せたのが本名が書かれた身分証ということだ。
俺は友達に偽名を語る趣味はない。
たとえ今はまだ友達でなくても、いずれかはそうなる予定なので同じことだ。
俺が見せつけた身分証を見ながらクリちゃんが不機嫌そうな口を開く。
「新任の方だったんですか。中級魔術師の——え？　嘘。え、どういうこと？　え？」
凄い戸惑いっぷりだ。
やたらと『え』という言葉が聞こえる。
混乱してブツブツと1人呟いているクリちゃんに話し掛ける。
「ま、そういうことだ。学校では正体を隠す予定だから、レイジと呼んでくれ。じゃあまたな、クリちゃん」
俺は身分証を仕舞ってから、一方的にクリちゃんに別れを告げ、

我が家へと駆け足で向かった。
　クリちゃんが落ち着くまで待っても良かったが、なんか恥ずかしいようなこそばゆいようなよくわからん感覚に襲われたので、とりあえず逃げ出した。

１－６　初授業

今日は平日。
いよいよ俺が担当することになる専門科目の縫合魔術の授業がある。
初めての授業に年甲斐もなく緊張してあまり眠れなかった。
しかし、なんで縫合魔術なんだろうか。
ラージェに頼まれたため引き受けたが、縫合魔術はそこまで珍しいものではない。
よって、生徒の需要も多い反面、教えられる教師の数も少なくないはずだ。
ましてや俺が教えるのは中級レベルの縫合魔術だ。
いくらでも俺以外に相応しい教師がいそうなもんだ。
うーむ、わからん。

縫合魔術は治癒術の１つで、主に切り傷を治癒するのに使われる。
魔術の糸を使って切れた部位を縫合するだけの簡単魔術に思われがちだが、人体の構造を最低限把握している必要はあるし、より精密な魔力操作が必要不可欠である。
上級レベル以上の術者になると、中程度の切り傷なら３０秒弱で完全な治癒が可能になる。
俺が教えることになる中級レベルの縫合魔術の資格取得条件は、１分前後で中程度の傷口を８割以上治癒できることだったと思う。
そのレベルまで生徒を導くのが、この授業での俺の仕事ということだ。
まあ、治癒術は比較的得意分野なので問題はないだろう。
特に必要な道具もないので、身軽すぎて逆に不安になるな。
防具に着替え終わった俺は、忘れていることがないか再度確認を

し玄関へ向かう。

「いよいよですね。頑張ってください」

玄関に待機していたローザが、部屋からやって来た俺に激励の言葉を掛けてくれた。

俺は『ああ……』と一言返事をして、着ていたレザーコートを脱ぎ、自身の左肩にワイルドに掛ける。

そして一言。

「行ってくるぜ、ローザ」

決まった。

これは男でも惚れる。

自分に陶酔していると、家の奥から同居人である兄妹が顔を見せた。

「いやいや、なんでコートを脱ぐんだよ。誰に聞いても今日は寒いと答えるぞ。レイジは頭がおかしいのか？」

ブルーが俺への嫉妬に気が狂ったのか、意味不明なことを言い始めたので１つ教えてやる。

「男の嫉妬は見苦しいぞ、ブルー。男には辛いとわかっていてもやらねばならないこともあるんだ、覚えておけ」

うひゃー、こりゃ痺れるわ。

犯罪的だぜ、俺。

「まーた変なスイッチ入っちゃってるよ。
この寒さの中、袖が半分しかないシャツ1枚で外を歩くとかなんの罰ゲームだよ。
ローザやフィーもなんかいってやれよー」
だめだ、ブルーは頭がやられてしまったらしい。
「我が道を行くという感じが、レイジ様らしくていいじゃないですか。私は好きですよ」
「この状態のレイジに何か言っても……無駄」
ローザとフィーが順に答えた。
「そういうことだ、ブルー。自分の過ちを認めることも大事なことだぞ」
「あー、もういいや。
まぁ、とにかく教師としての初勤務頑張れよな」
「任せておけ。それでは行ってくる」
3人の見送りの挨拶を胸に我が家を出た。
――うわっ、さむ！
俺は肩に掛けてあったレザーコートを着た。
自分の過ちを認めることは大事なことなのだ。
教室のドアの前に到着する。
この先1ヶ月間、俺が担当する生徒がいるであろう教室だ。

時刻は授業開始1分前。
生徒は授業開始3分前までに教室内で待機することが原則なので、もう揃っているだろう。
俺は意を決する。

ガラッ

うわー、いっぱいいるよ。
教室内では30人くらいの生徒が着席して俺を見ている。
そんなに見詰められちゃ照れるってもんだ。
段差のある教室で2列目の席、3列目の席と後ろにいくほど高度が高くなっているので、一人一人の顔がよく見える。
まずは簡単な自己紹介だな。
静寂を破るため俺は口を開いた。

「こんにちは。縫合魔術を担当するレイジだ。
趣味は糸通し、特技は服のほつれた糸を途中で切らずに最後まで引き抜くこと、好きな食べ物は麺類、無人島に1つだけ持っていくなら糸通しだ。
よろしく頼む」

裁縫好きをアピールしておいた。
これで皆のハートをキャッチだ。
そう思っていたが反応が悪い。
というより、皆が俺を怪しい者を見る目で見ている。
実は裁縫とかまったく興味ないのがばれたか？
真の裁縫好きの目は誤魔化せないということか……。
さてどうしたものかと考えていると、最前列中央、7番と書かれた席に座っている赤みのある茶髪にお洒落な赤いローブを着た、いかにもお嬢様という感じの生徒が声を上げる。

「中級縫合魔術の授業に新しい教師が来ると聞いて来てみれば、随分胡散臭い教師が来たものですわね。
中級魔術士らしいですけども、縫合魔術はちゃんと使えまして？」

なんとも見掛け通りな感じだな。
教師として中級魔術士は最低レベルだから舐められているのだろう。
生徒によっては上級魔術士等級の資格を持っている者もいるらしい。
恐らく目の前のお嬢様は中級魔術士か上級魔術士なのだと推測する。
俺はマゾじゃないので見下されたような言い方をされても嬉しくない。
高飛車な態度なお嬢様に俺は言葉を返す。

「もちろん使えるぞ。たかぴーは使えるのか？」

「当然ですわ。って、たかぴーってなんですの!？　変なあだ名をつけないでくださいませ！」

「高い敏捷性を持つ心優しい淑女を略したものだったんだが、気に入らなかったか。残念……」

もちろん高飛車を略しただけだ。

「え？　ほ、褒め言葉でしたの？　そ、その、ありがとう存じます」

え？　なにこの子。
いい子じゃん。

誰だよ見掛け通りな感じとかいったの。
高い敏捷性の淑女とか褒め言葉かすら怪しいのに感謝されちゃったぞ。
すごい純粋な子なのか？
もしかすると、最初の『中級魔術士らしいですけども、縫合魔術は使えまして？』というのも煽りではなく、単純に心配してくれたのか？
俺もまだまだ人を見る目が足りないな。
すまん、たかびー。
心の中で謝ることにした。
さて、気を取り直して授業を始めるか。

１－７　縫合魔術実習

縫合魔術の授業を開始して１５分。
縫合魔術を使う際に必要となる人体の知識を簡単に説明し終わったところだ。
皆既に知っていました、みたいな顔をしている。
治癒術は共通して人体の知識が必要となるので、ある程度は他の授業でも学んできたんだろうな。
本来ならばもっとじっくりやるべきものだが、既に皆知っているなら俺が改めて教える必要もない。
俺は説明を適度に端折り要点だけをまとめたので、かなり早く最初のステップは終わった。
たかびーは俺が授業を始めると静かになり、真剣な表情で授業を聞いてくれている。
とても真面目で努力家だと授業を受ける姿勢から伝わってくる。
ちなみに、授業を始める前に軽く聞いてみたが、たかびーは上級魔術士らしい。
生徒としてはトップレベルだ。
魔術士等級を偽っているとはいえ、たかびーから見れば俺は魔術士等級が低いはずなのに一切それを思わせない。
たかびーはいい子だなぁ。
たかびー曰く、学内には上級魔術士等級の資格を持つ生徒は７０人前後いるとのことだ。
最上級魔術士等級の資格を持つ生徒も３人いるらしく、俺は初耳だったので結構びっくりだった。

さて、次のステップに入るか。

「治癒術に限らず魔術は使わないとまず上達しない。というわけで、

もう少ししたら医務室に行って実際に怪我人相手に実習しようと思う。
相手は実際に生きた人間なので、変なことをされると俺が叱られちゃうんだよな。だから先に俺が最低限の練度があるかチェックする。
「さあ皆、針と糸を生成してみてくれー」
教室内がざわつく。
突然の実習の機会に、ほとんどの生徒の顔が、嬉しさに不安が見え隠れしているようなものになっている。
そんな時たかびーが急に立ち上がる。
「ちょっと本気ですの！？　生徒の実力もはっきりわからない最初の授業で、いきなり人間相手の治癒術の実習なんて聞いたことありませんわよ！　危険ですわ！」
「だから、今から実力を確認するんじゃないか。たかびーはもう少し人の話を聞かないとだめだぞ」
「生成した針と糸を見るだけで実力が分かったら苦労しませんわよ！　普通は魔物や練習用の人形で何度も練習するものですわ！」
「落ち着けたかびー。なにも医務室で全員バラバラに練習するわけじゃないさ。確実に俺の目に届く範囲で多くて３人ずつだ。
それに、都合よく縫合魔術が必要な怪我人がそんなにいるわけもないしな。
ぱっと見て俺が問題ないと思う生徒にだけ縫合魔術を使った治療を実演してもらう。他の生徒はそれを見学だ」

当たり前だけど信用がないなー。
特級魔術士を名乗ればこれも変わってくるんだろうな。

「……そういうことなら……わかりましたわ」

なんとかたかびーにはわかってもらえたが、いまいち釈然としないようだ。
俺にかかる責任と負担、練習台になってもらう怪我人、それらのうちいずれか、もしくは全てを気遣ってのことだろう。
そうでなければ実技練習の機会に喜びはすれど、こんなに反発はしないはずだ。

「たかびーが優しい人間だということは良くわかった。とにかく全責任は俺が持つから心配はいらない。
たかびーも生徒らしく素直に喜んでいいんだぞ」

「な！？　誰があなたの心配をしていると言ったんですの！
私はただ、あなたが――」

「よし、よくわかったぞ、たかびー。授業が進まないのでそろそろ口チャックだ」

たかびーの言葉を遮って静かにさせる。
本当にこれで静かになるのだからたかびーは偉い。
というか、やっぱりたかびーに心配されてたんだな、俺。

「よし、気を取り直してっと。
皆針と糸を生成してみてくれ。俺がいいと言うまで消すなよー」

生徒達が魔力で針と糸を生成する。

うーむ、皆結構上手ぃな。
予想していたよりもずっと形になっている。
「1番の席の君、糸が少し弱ぃな。3割増しで再構成だ。隣の君は、糸は丁度いいけど針が少し安定していない。もう少し魔力を凝縮させて。
4番、針が太すぎる。長さはそのままで太さを3分の2に抑えて。7番たかびー、いい子だなぁ……っといかんいかん。針も糸も完璧だな。後はサイズ、バランスともに維持し、魔力濃度を上げるだけでどんどん縫合の効率が上がるぞ。
10番──」
……
ふぅ。
教師っぽいことをできた気がする。
一通り生徒の魔力針と魔力糸を確認、指摘した後、再構成させてみた。
皆優秀で、指摘されたことを大体の生徒が1回から3回の再構成で修正できた。
「よし、お前らよく耐えてくれた！
これなら大丈夫だ！　行くぞ、我等が戦場医務室へ！」
「「うおー！！」」
「な、なんですの！　この空気は！？」
若干1名ちがったが、教室内を熱い声が響き渡る。

針と糸のチェックが終わった頃には何かよくわからないノリにな
っていた。
士気が高いことは悪いことではないので問題はないだろう。
問題ないよな……？

ザッザッザッ

「よし、止まれ！」

ザッ！

俺が担当している全生徒の行進が止まる。
道中何人かとすれ違ったが、例外なく全員恐怖を顔に浮かべて逃
げ去った。
俺はとんでもないソルジャー達を目醒めさせてしまったのかもし
れない。

コンコン、ガラッ

「失礼、中級縫合魔術を担当しているレイジだ。責任者はいるか？」

医務室のドアを開け、近くにいた医務室関係者らしき女性に声を
掛けた。

「レイジ様ですね。少々お待ちください」

そう言うと女性は奥へと去って行く。
１分ほどで初老の男性がやって来た。

「こんにちは。レイジさんですね。
話しは学校長から聞いていています。中へどうぞ」
「失礼する。よし、お前らも入ってこい！」
部屋の外にいるソルジャー達に呼び掛ける。
「「はっ！！」」
俺、たかびーと続き、ソルジャー達が隊を乱さず2列で入ってくる。
たかびーだけはさっきからずっと何かにびくびくと怯えたような様子で俺の後ろ2メートルほどの距離を維持している。
「どうしたたかびー。医務室が怖いのか？」
「後ろにいる皆さんが怖いんですの！」
なるほど。
医務室の関係者らしき人や治癒を受けている患者が、何かに怯えた顔をしていたのはそういうことだったか。
しょうがない、怖がるたかびーを少しでも安心させてやろう。
「大丈夫だ。実は俺も怖い」
言いながら笑顔で親指を上に立てる。
「……」
あれ？

あまり効果はなかったようだ。

医務室はぱっと見ただけで数十部屋はありそうだ。
この学校はどこに行くにしても広いなー。
医務室内に１人にされれば３分で迷子になる自信がある。

２回ほどドアを開き、ようやく目的地らしき場所に辿り着いた。

「この時間は剣術の授業が２つ、斧術の授業が１つあるので、縫合魔術による治癒を要望する生徒が多いんですよ」

医務室責任者の初老男性が説明してくれる。
確かに部屋内には、１０人くらい順番待ちをしている生徒らしき怪我人がいた。

「なるほど。見た感じ軽傷の生徒しかいないようだが、ここの怪我人は任せてもらっても？」

「ええ、そのつもりです。
それでは私は仕事がありますので、離れますね。何かあれば、近くにいる医務室員に声を掛けてください」

そう言うと初老男性は部屋を去っていた。
思ったよりあっさりしているな。
ラージェがうまいこと言ってくれたのだろう。

「さて、始めるかー。
先ずは手本として俺が１人治癒するから、その後に３人ずつ順番に前に出て来て治癒を行ってもらうぞー」

俺はそう言うと、怪我をしている生徒達に簡単に挨拶をした後、事情を説明してから作業に移る。

「傷を見せてもらうよ。傷はこの腕の切り傷だけで間違いないかな？」

たかびーやソルジャー達の注目に晒されながら、近くにいた怪我人に優しい口調で尋ねる。

見た感じ怪我は1箇所。

中サイズの刃物を掠めてできたといったところか。

「はい、剣術の実技訓練でやってしまって」

「わかった。

少しだけ痛むかも知れないが我慢してくれよ」

さて、腕の見せ所だ。

こういう時、いいところを見せたいと思うのは仕方のないことだろう。

まずは魔力針と魔力糸を生成する。

生成まで5秒足らず。

我ながらなかなか早い。

ざわっ

「え？　嘘っ」

「は、早すぎる……」

「あんな高い魔力密度の針と糸初めて見るわ」

生徒達の驚愕を表す声がいくつか聞こえてくる。
ふふふ、皆驚いているな。
チラッとたかぴーを見る。
たかぴーは真剣な眼差しで俺を見てはいるものの、驚きといった表情はない。
ちょっとがっかりだ。
結構自信あったんだがなー。

時間をあまり掛けるわけにはいかないので、俺は治療に移る。
この程度の傷なら４針縫って、仕上げに活性化魔術を使えば傷口も残らなくなる。
縫合魔術の授業なので活性化魔術は関係ないが、怪我人にもそんな理屈は関係ない。
俺は全ての工程を５秒弱で行う。
生徒達が少しざわついていたが気にしない。
人の魔術を見て、意見を交換することは大事なことだ。

「完了だ。痛みはないかい？」

俺の治癒を見て口を開けてかたまっていた生徒に声を掛ける。

「……え？　あ、はい！　まったく痛くないです。
ありがとうございます！」

「そうか、こちらこそ授業に付き合ってもらって助かったよ。お大事に」

もう１度俺の言葉にお礼を返し、怪我をしていた生徒が去る。

「さあ、皆にもやってもらうぞー。俺がちゃんと終始見ているし、

心配はいらないからな。
席の番号が若かった順に呼ぶから前に出て来てくれ」
予定では、一部生徒のみの実習予定だったが変更した。
理由は2つ。
1つは生徒全員が十分実習可能なほど縫合魔術のレベルが高かったこと。
2つ目は怪我人が予想より多く、さらに複数箇所怪我してる者もいるため、1人1箇所以上の怪我の治癒が可能だったことだ。
「1番、2番、4番、前に出て来てくれ」
緊張した様子で該当者が出て来る。
「焦らず確実にな。
じゃあそれぞれ担当する者を決めて治癒に取り掛かってくれ」
俺の言葉を聞くと、それぞれが担当する相手の元へ移動し、作業を開始する。
「1番、糸が少しだけ強い。1割弱めて再構成。
2番4番は治癒作業に移っていいぞ。慎重にな」
治療される側の生徒は気楽にしているが、治癒する側はかなり緊張している様子だ。
「1番、今度は完璧だ。治癒作業に移っていいぞ。
2番、針を通す速度が遅い。針を刺す時にもう少し針を通すイメージを固めるといいぞ。
4番、いい調子だ。そのまま頑張れ」

順調だ。
後２分もあれば、１組目は終わりそうだな。
「よし、２組目、たかびー、１０番、１２番。
前に出て針と糸の生成を始めていいぞ。
４番、よくやった。上出来だ。戻っていいぞ」

隣にたかびーが立つ。

「先生、素直に驚きましたわ。
技術、知識、指導力、そして思いやり、どれをとっても言うことがありませんもの。
私、この授業を登録して本当によかったですわ」

たかびーはそう言うと、俺の言葉を待たずに怪我人の方へと駆け足で離れていった。

1－8　選択

「よし、これで今日の縫合魔術の授業を終了する。皆お疲れ様ー」

怪我人の治療は順調に終わり、時間も丁度よかったので今日はこの場で解散することにした。

俺の言葉と同時に空気が軽くなり、一気に周囲がざわつく。

ある生徒は先ほどの感覚を忘れないように針と糸を再度生成し、ある生徒は他の生徒と意見交換をする。

「はいはい、とにかく何をするにしても、まずは医務室を退室してからだー」

医務室内で騒ぐのはあまりよろしくないので、とにかく退室を促す。

「先生、今日はありがとうございました。とても勉強になりました」

「本当レイジ先生凄かったです！　俺こんな充実した授業初めてかもしれないっす」

帰り際に数人の生徒が直接俺に挨拶しにくる。

「それはよかった。俺も頑張った甲斐がある。じゃあまたなー」

それに対し言葉を返し、生徒を見送る。

「大好評ですわね。

皆さん口を揃えて先生のことをベタ褒めでしたわよ？」

１人最後まで残っていたたかびーが俺を見て言う。
「たかびーにも満足してもらえたようだしな」
「そうですわね。あの言葉に偽りはありませんことよ。
ただ……いえ、なんでもありませんわ」
たかびーが一瞬深刻そうな顔で意味深な発言をして、すぐにまた表情を緩める。
「まぁ、とにかくここに長居はできん。
俺は責任者のおっちゃんに挨拶してからここを出るからここでお別れだ。
じゃあな、たかびー」
そう言って部屋の入り口に向かおうとした時、
――バタン！
「キャー！」
「急患だ！　早く治癒を頼む！」
突然医務室入り口の方から、大きな音が聞こえた。
「な、何が起きたんですの！？」
「急患という言葉が聞こえたな。
悲鳴は恐らく医務室内にいた一般生徒が患者の傷を見た時のものだろう」

深く考える前に、俺とたかびーは互いに頷き合い入り口へと走る。

「急患だー！　どいてくれー！」

正面から、急患を平面の板のようなものに乗せ2人の男がこちら側に向かって運んで来る。

縫合魔術の実習を行った部屋の隣にある部屋に運ぼうとしているのだろう。

俺らを案内してくれた責任者の初老男性が深刻そうな顔で隣の部屋に入っていった。

「これは……」

すれ違いざまに見えた急患の姿を見て、たかびーの声が途切れる。

俺も見たが、かなり危険な状態だった。

左腕が完全に切断され、切断面は毒により変色し、人間のものとは思えない色をしていた。

ほかにも多数の擦り傷切り傷はあったが、それらは命に影響を与えるものではなく左腕が致命傷となっている。

「これは急がないとまずいな……。

俺はこの学校に来て日が浅いので分からないんだが、この学校の治癒魔術師のレベルはどんなもんなんだ？」

一瞬考えるようにして、たかびーが答える。

「どの医務室にも最上級レベルの治癒魔術を扱う魔術師が1人はいるので高いと言えますわ。

ですが、今の方の治療になるとかなり難しいですわね……。

あそこまで毒が酷いと、それこそシラキナ帝国の特級魔術師ミディム様でもなければ確実な治療はとても……」

「そうか……」

ミディムが誰なのかは知らない。
この学校内の魔術士では治癒が難しいということもわかった。
だが、俺なら治療することは可能だろう。
問題となるのは、話を聞く限り人前で治療すると確実に目立つことだ。
中級魔術師ではないとばれることも間違いない。
どうする。

「無責任かもしれませんが、私達には何もできませんわ」

たかぴーは悔しそうに唇を噛む。

俺は……。
覚悟を決める。
考えている時間はない。
やらないで後悔するよりやって後悔だ。

「え？　ちょ、ちょっと何処へ行くんですの！？
そっちは――」

たかぴーの言葉を最後まで聞かず患者のいる部屋の扉を開く。

バタン

「――な、なんだね！

今は1秒すら無駄にはできない大事な時なんだ！
早く出て行きなさい！」

責任者の初老男性が叫ぶ。

「そうだ、今は1秒すら惜しい。
だから俺に任せてくれ」

「な、何を馬鹿なことを！
中級魔術師の君に出る幕はない！
早く出て行きなさい！」

「俺に任せてくれ。
うまくいかなかったら、俺の命をこいつの墓に捧げる」

「そんなことをして何になる！
おい、誰か！　こいつを――」

「せ、せんせい……。
このひ、この人に、…まかせ…て、や…てくれ…。
お、おれか…らも、…たのみ、ます」

横たわっていた男が掠れた声を上げる。
意外な人物が味方してくれた。
責任者の初老男性は口を開けて何かを言おうとするが、うまく言葉が出ていない。

バタン

「私からも頼みますわ！」

さらに後ろから思わぬ味方が現れる。
たかぴーは俺に力強い笑みを向ける。
出会ってそう経っていない少女が、こんなに信頼してくれている。
その事実に俺は胸が熱くなってくるのを感じる。

「2人ともありがとう。
信頼してくれたこと、絶対に後悔はさせない……。
頼むおっちゃん俺にやらせてくれ！　とにかく時間が惜しい。
後からなら責任でも罰でもなんでも受ける！」

俺がこんな熱血キャラだとは、自分でも知らなかった。
俺は目の前にいる初老男性の答えを待つ。

「わかった、君の好きにしなさい……。
ただし！　……全ての責任は私が持つ。
それと私にも手伝えることがあれば手伝わせてもらうぞ。これが条件だ！」

うわ、なんだこの展開。
皆いい人すぎて涙が出そうだ。

「ありがとうございます」

感謝の言葉を述べて俺は作業に取り掛かる。

「おっちゃん、麻酔と拘束の魔術は使えるか！？」

「ああ、使えるぞ！　任せておけ！」

「ありがたい、さっそく頼む！
たかびーは切断した左腕を体の切断面に近づけて動かさないように固定。
固定後は止血魔術を頼みたい。できるか？」

「わかった！」
「ええ、わかりましたわ！」

さて、俺も作業に入るか。
2人がすぐに行動に移ってくれる。

まずは解毒だ。
今回の治癒ではこれが1番厄介な問題だ。
左腕の切断面を改めて確認する。
かなり広い範囲に侵食しているな……。
左手の人差し指の先端に魔力を込める。
体に害する魔術や毒を抜き取る際に使う抽出魔術だ。
同時に眼にも魔力を込め、患者の体を蝕む毒の状態を完全に把握しておく。
毒の状態を完全に把握した後、毒を2つの切断面から抜き出すイメージを正確に頭の中で組み立て、魔力を込めた指先を近づける。
瞬間、勢いよく体を蝕んでいた薄い灰色をした液体が、切断面に浮き上がる。
手順としては少ないが、これにはかなりの集中力と知識、技術が必要になる。
近くで切断した腕を持ってくれているたかびーの息を呑む音が聞こえる。
おっちゃんも顔に汗を浮かべ険しい眼差しをこちらに向けている。
「よし、全ての毒を断面に集め終わった。

これから、解毒作業に入る」
「あの毒をこんな短時間で……」
「なんという高レベルの抽出魔術だ。
と、とても信じられん」

たかびーとおっちゃんが何か呟いていたが、治癒に集中している俺にはうまく聞き取れなかった。
左手の人差し指に込めた魔力をそのまま維持し、中指で解毒魔術を扱う。
2つの魔術を絶やさぬように左手に気を配りつつ、右手に魔力を込め、3つ目の魔術、縫合魔術を使う。
ほかに2つの魔術を使っているため、先ほどの授業時のように針と糸の生成まで5秒足らずでとはいかなかったが、それでも10秒も掛からないで生成が完了する。
左手により解毒作業が進められ、切断面の表面に浮き出ていた灰色の液体が蒸発を始める。
気化した毒は、おっちゃんが専用の魔法具を使って空の容器に吸収してくれているので問題ないだろう。
緊迫した時間が暫し続く。
針と糸はいつでも縫合作業に入れるよう、万全な状態を保っている。
解毒作業を切断面の中心部から外側に向けて進め、今は断面外側2ミリメートル部分、ようやく終わりが見えてきた。
「解毒が終わり次第すぐに縫合に入る。
たかびーはタイミングを図って止血魔術を解除してくれ」
「わかりましたわ」

たかびーの返事から約１０秒、解毒作業が完了した。
すぐにたかびーが止血魔術を解除する。
素晴らしいタイミングだ。
俺は２つの魔術を解除してフリーになった左手で、切断面に軽い活性化魔術を行使する。
本来は、細胞を刺激し自己治癒力を高めることで簡単な傷を治癒するために使う魔術だが、今回のように大規模な縫合魔術を必要とする怪我に対しても用いられる。
縫合する部位の細胞が活性化している方が治癒の成功率が高いのだ。

細胞が活性化することで切断面に血液が滲む。
今にも溢れ出しそうになったのを目安に縫合作業に移る。
神経、筋肉、骨、肉、全てを切断面同士で僅かな狂いもなく針を通していく。
全てを繋ぎ合わせ終わったのを確認し、針を手前に引き糸を切る。
時間にして１５秒。
一連の動作が終わった時点で、目の前の瀕死だった男性の左腕は、最初から繋がっていたのではないかと疑うほど自然にくっ付いていた。
うーむ、我ながらいい仕事をした。
緊張が解け思考にも余裕が出てくる。

「あ、ありえないですわ……」

たかびーが１人呟く。
そういえば、治癒作業中もずっとブツブツ呟いてた気がする。
まぁ、中級魔術士が扱うレベルの魔術じゃなかったのは間違いないし、驚くのも無理はないだろう。
おっちゃんは何やら難しい顔をしているが、たかびーに比べると

終始冷静だった気がする。
さすがこの国トップクラスの医療魔術士といったところか。
麻酔や拘束の魔術もかなりのレベルだった。

「完了だ。
おっちゃん、魔術を解いてくれ」

「ああ、わかった。
残りの治療は私に任せてもらっていいか？
後は軽傷なので、私１人でもすぐに治療可能だろう」

言いながらおっちゃんは麻酔と拘束の魔術を解き、活性化魔術を両手に用意する。
おっちゃんなら間違いないだろう。

「わかった。後の治癒は任せる」

俺の言葉に今まで発言の機会を伺っていたのか、たかぴーが今にも飛びかかってきそうな勢いで俺に声を浴びせる。

「先生、今の魔術は一体なんなんですの!?
中級魔術師がどうとかそんなレベルじゃありませんわ！
あれではまるで特――」

「っう……ありがてぇ、…ありがてぇ……ぅっ」

たかぴーが言葉を中断させ、横に視線をやる。
俺もたかぴーの言葉攻めから救ってくれた勇者の方を見る。
おっちゃんの治癒魔術を受けている男性が、自身の左手を動かしながら顔を大きく歪めて涙を流していた。

「っな！？　まさかもう左腕が動くのか！」

おっちゃんが驚きを声にする。

たかぴーも目を見開いて、横たわる男性の左腕を見ている。

「左腕は問題なさそうだな。

今日はあまり左腕に負担を掛けないようにしてくれよ。

大丈夫だとは思うが、用心するに越したことはない」

「……ありがとうございます。

この恩は絶対に……絶対に忘れません！！」

叫び声が医務室に響き渡った。

1—9　前触れ

いやー。
随分忙しい初勤務だった。
俺は今日のことを振り返りながら我が家の食卓に並ぶオカズに手を伸ばす。
「それで結局その3人には中級魔術師じゃないことがばれちゃったんだよな。
訳あって魔術師等級を隠してるって言ったら、何も聞かないでくれたから問題はなかったんだけどね。
治療のことも他言しないことを約束してくれたし、たかびーも医務室のおっちゃんも患者の兄ちゃんもいい人で助かったなー」
「私としては、レイジ様の素晴らしさを校内の皆様にもわかっていただきたいので複雑な話ですね。
どうせなら、この機会にレイジ様のご活躍を校内に噂して少しずつ正体を明かすというのはいかがですか？　私でよければ喜んで協力させて頂ますが」
ローザが俺のカップに紅茶を注ぎながら恐ろしい提案をする。
「いやいや、いずればれるにしても意図的にばらす必要はないだろ」
それにローザが俺の噂なんて流したらどうなるかわかったもんじゃない。
語り手によって噂なんて変わってくるものだ。
発信元がローザとなると、3日後には校内の噂上でヒトを超越した神のような存在になってることを想像するのは難しくない。

俺に続きブルーが口の中の物を飲み込み発言する。
「正体がばれてレイジが忙しくなるのは俺はどうでもいいけどレイジの周辺も騒がしくなるからなー。
この家や俺たちにまで火の粉が飛んでくるだろうし、今回はレイジを支援するぞ」
「よく言ったブルー！　お前も今日から1人のダンディズムを嗜む真の男だということを認めてやろう」
「いらねー……」
そう言ってブルーは露骨に嫌そうな顔をする。
まったく強がっちゃってかわいい奴め。
「なあに、遠慮はいらないぞ。
後でお前用の黒い服一式を知り合いに頼んで見繕ってもらおう。
まずは形からだ」
「よかったですね、ブルー。
いい様です。ふふふ」
「いらねえし嬉しくねえよ！
ローザも俺に八つ当たりするなよ！」
ブルーが俺とローザに必死な抵抗を見せる。
これが反抗期というやつか。
こんな時は優しく接して、熱く尖った心を溶かしてやるか。
「素直じゃないなーブルーは。そんなんじゃ立派なダンディになれ

ないぞ。
ほら野菜食べろ野菜。俺からのプレゼントだ」
野菜を俺の皿からブルーの皿に移し替える。
これが俺の優しさだ。
受け取れ、ブルー。
「あ、レイジが食べたくないからって俺の皿に移すなよ！　ずるいぞ！　俺だってこれあんまり好きじゃないんからな！」
「ブルー、野菜は体にいいんですよ。残すのは食卓を通して皆の健康を管理する私が許しません。
ふふふ、あなたが悪いのですよブルー」
「ひぃー、助けてくれフィー！
このままじゃ俺は何も悪いことしてないのに野菜を食わされちまうよ！」
ブルーがついに音を上げて妹のフィーに助けを求めた。
厄介事を避けるためか、我関せずを貫いて食事を続けていたフィーが手を止め兄の方を見る。
「犠牲は忘れない……かも？」
それだけ言うと、兄の言葉を待たずに再び食事に戻る。
兄のピンチより目の前の1食分の食料が大事らしい。
「ブルー、強く生きろ……」
「ブルー、あなたは1人じゃないわ……」

俺とローザがブルーに励ましの言葉を贈る。
「くっそー！　全部食ってやる！　この家の野菜を食い尽くして後悔させてやるからな！！」
ブルーが凄い勢いで野菜を口に掻き込み始める。
その後、フィーが謝罪の言葉を告げるまでは、我が家の食卓に並ぶ野菜は全てブルーの口を通して虚無の世界へと消え去ることになる。

ーーーーーーーーー

学校敷地内、住宅区域にある一際大きな屋敷の一室。
１人の女性が紅茶のカップを手に取り口元まで運び、傾ける。
肩の下までまっすぐ続く艶やかな金色に、白く透き通るような肌。
スレンダーな身体にもしっかりと女性らしい魅力が溢れている。
彼女の名はシェルティナ・メルディオール。
１００人に聞けば１００人が美しいと答えるであろう容姿を持つ彼女は、学校内の生徒では３人しかいない最上級魔術師である。

「はぁ……憂鬱ね……」

ユライト王国に来て５年。
彼女の溜息は日に日に増える一方である。
ユライト王国に来たのも、ユライト魔術総合学校に入学したのも理由があったためなのだが、まったく成果がないことが原因だった。
「せめて、学校長があの方のことを教えてくれれば……」
シェルティナの苦悩の声がこぼれる。

学校長ラージェがその人物と親しいことは比較的有名な話なので、シェルティナは今までに何度もラージェに探している人物について尋ねた。
しかし、ラージェが口を割ることはなかった。

コンコン

「シェルティナお嬢様。執事のオルケンです。宜しいですか？」

「入って」

ガチャ

「失礼致します」

「来客……というわけでもなさそうね。何か面白い話でも期待していいのかしら？」

この時間に執事のオルケンが部屋を訪れるということは、来客の知らせ以外では珍しい。

「是非にシェルティナお嬢様のお耳に入れたいことがありまして参りました」

シェルティナは落ち着いた態度を崩さずオルケンの言葉に耳を傾ける。
そんなシェルティナの態度から肯定の意を読み取りオルケンが口を開く。

「つい先日、1人の中級魔術士が教師としてこのユライト魔術総合

学校に就任したことをお話ししましたが、覚えてらっしゃいますか？」
「ええ、もちろん覚えているわ。
確かレイジ・アリーズという名前の男性教諭だったわね。
その方がどうかしたの？」
シェルティナは何かを期待するように、いつもより口早で会話を進める。
「レイジ・アリーズという人物なのですが、調べた結果いくつか不審な点が出てきました」
オルケンは手元に持っていた資料をシェルティナに渡した。
3分ほどでシェルティナが資料に一通り目を通し声を上げる。
「これは興味深いわね。
良くやったわオルケン」
「ありがとうございます」
シェルティナの嬉しそうな声に一言礼を述べ、オルケンが腰を折る。
「名前も経歴も偽り。それなのに学校長の推薦……確実にグルね」
「間違いないでしょう。
プロフィールが偽りだということは、見る者が見ればすぐにわかる程度でした。
恐らく一時的、もしくは一部の人間に隠したいだけで、絶対に隠

したいということではないのでしょう。
学校を第一に考える用心深いあの学校長が、これを見逃すはずが御座いません」
「そうね、あの学校長だものね。不信人物を泳がせておくこともしないわ。
もちろん意味もなくプロフィールの虚偽を認める方でもないし、何か理由があるのは間違いないわね」
シェルティナは資料にもう一度目を落とし口元を緩める。
そして期待に満ちた子供のような表情で言葉を続ける。
「学校長から推薦を得ることができるほど信頼されていて、尚且つ経歴だけでなく名前も偽る必要がある方。
猛毒に侵され切断した腕を１０分と掛からずに完治させた可能性もあり、中級縫合魔術の授業では中級魔術師とは思えないレベルの縫合魔術を行使。
……これらの情報を知って黙っていられるほど私は人間ができてはいないわ。
１３年間まともな手掛かり１つもなかったのよ。期待するなというのが無理な話よ。
すぐにその方に会いにいくわ」
「畏まりました」
「卒業までに強くなって、唯一あの方の行方を知っているであろう学校長を拷問してでも、あの方の情報を聞き出すつもりだったけれど、今だけは学校長に感謝したい気持ちよ。
まあ、今回の件の当てが外れたらやっぱり拷問計画を進める必要があるのだけれどね」

くすくすとシェルティナは笑う。
その顔からは先ほどまで溜息を吐いていたとは想像できない。
「ようやく……ようやくあなたに逢えるかもしれません。
レイジェ・イルミオン様」
愛しい者を呼ぶようにシェルティナが小さく呟く。
レイジが縫合魔術の授業を行った次の日のことである。

１－１０　自分の気持ち

今日は授業もなければ特に予定もない。
そんなわけで、校内に保管されている古代の魔法具をラージェを通して見せてもらった帰りだ。
いやー、楽しかったなー。
世界規模の宝物庫になると、やはり研究しがいがある素敵な魔法具がいっぱいだ。
家での研究用に1つ持ち帰りも許可されたし特級魔術士様様だな。
ぐふふ、これを研究しているだけで1ヶ月は楽しめそうだ。
俺は手に持っている古代の魔法具を大切に愛でる。

古代の魔法具は、製作時期、製作者不明の魔法具のことで、大体は遺跡や洞窟で発見される。
ユライト王国では発見された古代の魔法具は、ここユライト魔術総合学校で管理することになっている。
現代の魔造士が作る魔法具とはまったく別の魔術を用いて作られており、付加効果や製造方法がわからない物がほとんどだ。
非常に高レベルな呪いなどの罠が組み込まれていることが多々あるため、好んで研究する者はユライト王国には俺しかいないのではないのだろうか。
何が飛んでくるかわからないスリルがいい刺激になるんだけどなー。

古代の魔法具を鞄に仕舞い、お気に入りのテラスに出る。
本当は古代の魔法具を持って出歩くのはあまり良くないのだが、クリちゃんが遠目に見えたのだから仕方ない。

「やあ、クリちゃんじゃないか。こんな所で会うなんて珍しい」

「リースです。珍しいもなにもこのテラス以外で会ったこともないですよね」

相変わらずいい突っ込みだ。

「まあまあ、あまり細かいことを気にしちゃいけないぞクリちゃん。クリちゃんはいつもここにいるイメージがあるけど何か理由でもあるのか？」

「私の部屋がここから近いだけです。加えて、私もクロも家の中にいるより外が好きなので」

確かこの辺りには学生用の寄宿舎がいくつかあったな。
クリちゃんはそこに住んでいるということか。
クリちゃんが閉じた口を再度開く。

「そういう先生こそ、ここには何の用ですか？」

「クリちゃんの姿が見えたから会いにきただけだぞ。信じてクリ？」

『信じてクリ？』の部分で軽く両手の指先を交差させ首を傾げることで、ちょっと可愛い感じを出して答えてみた。
女の子は可愛いものに弱いからな。

「……最後の言葉は聞かなかったことにします。あと質問を変えます。私に何か用ですか？」

聞かなかったことにされた。
価値観は人によって違うしクリちゃんは少し特殊なのかもしれな

いな。

「校内を歩いていたら友達の姿を見つけたので声を掛けた、それだけだが？」

クリちゃんが小さく溜息を着く。

「いつから友達になったんですか、もう。
そういえばこの前は動揺していて聞きそびれましたが、この前のあれは本当なんですよね？」

「ああ、俺とクリちゃんが前世の恋人だって話か。
あれが本当かどうかは実は誰にもわからないんだよねー」

俺は真実を明かすことにした。

嘘はよくないからな。

「違います！
えっと、レイジさん……でしたっけ？の身分証に書いてあった事です」

あー、あれか。あの時のクリちゃんの動揺っぷりは可愛かったなぁ。

頭に思い浮かべながらクリちゃんの問いに答える。

「ああ、本当だ。ちょっと色々思うところがあってな。
今後は何か問題が起きない限りは、この学校で教師生活をして余生を過ごす予定だぞ」

「やっぱり本当なんですね……。

なんでそんなに若いんですか、とか、なんで突然表舞台から姿を消したんですか、とか色々疑問は残りますが、まぁ今はいいです」

クリちゃんが1度言葉を区切り、軽く息を吐く。

その後、俺の目を真っ直ぐに捉えて、

「出会っていきなり意味がわからないことを言い出したと思ったら、変なあだ名を付けてきたり友達顔して何度も会いに来る。

でも、不思議と憎めない優しい感じのする人。

それが私の中のあなたの印象です。

正直な話しをすると、ちょっとだけ友達になってみたいと思い始めてた気が自分でもします」

本当にちょっとだけですよ？　と念を押してくるクリちゃん。

周囲に人がいないことを確認し、ほんの僅かに間を空けて再び口を開く。

「私はレイジェ・イルミオンという人物に小さい頃から憧れていたんです。

もちろん実際に会ったことはないので、人の話や書物など間接的にしか知りませんでしたけどね。

そんな中、先日あなたは自分がその私の憧れてた人物だというんですよ。

途端に、友達になりたいと思い始めていた自分の気持ちが元からあったものなのか、レイジェ・イルミオンという子供の頃からのヒーローへの憧れからきたものなのかわからなくなりました」

数秒の沈黙。

俺が何か喋るべきなのかと考えているとクリちゃんが再び話し始める。

「……少しだけ、少しだけ自分の気持ちを整理する時間をください。たかが友達と思うかもしれませんが、私には大切なことなんです。あなたがレイジェ・イルミオンだからお近づきになりたい、友達になりたいというのは嫌なんです。

とはいってもこれは私の気持ちの問題なのでレイジさんは特に気にしなくていいです。

ですので、レイジさんは今までと態度を変えないでください。ただ、私がレイジさんをレイジさんとして友達になりたいと確信できたら、その時は改めて私の方からお願いしますので、今はまだ1人の生徒と教師として接させてくださ
い」

全てを言い終えてクリちゃんの表情少しだけ柔らかくなる。

「そこまで考えてくれてるなら俺からは何も言えないな。注文通りいつもと変わらずクリちゃんに接するくらいだ。今までと態度を変えないってことは、俺からするとクリちゃんは友達というのも変わらないしな。

まぁこれからも宜しく頼む」

「はい、こちらこそ宜しくお願いします。レイジさん」

テラスでクリちゃんと別れた俺は、我が家への道を再度進める。今日は平日なので道中人で賑わっていたが、我が家が近くなると、視界に人も入らなくなり少し寂しく感じる。

我が家への帰路も終盤に差し掛かり、最後の曲がり角を左折したところで、前方に１人の女生徒らしき人物が壁を背に軽く腕を組んで立っているのが見えた。
人が我が家の近くにいること自体は珍しいことではあるが、ありえないことではない。
俺は別段のように注意して道を変えるということもしなかった。

めちゃくちゃ美人だなー。
俺があと１０年若ければ、衝動的に結婚を申し込んでいたかもしれないな。

気品に溢れた姿が印象的で、整った顔立ちにさらりと流れる金髪に目を奪われる。
俺の手元に酒と食料と敷物があれば、ここで花見をしたいくらいだ。
もちろん花とは視界に映っている１人の美しきレディのことである。
１度帰宅した後、必要な物を用意してから、改めて花見のために再度戻ってくるのも手か。
ただ、そんなことをしたら通報されて、俺の余生は学校長ラージェのデコピンにより、刈り取られることになりそうなのでやめておこう。
俺は大人なのでやっていいことと悪いことの区別はつくのだ。
レディの正面を横切る際に、紳士的にチラ見をする程度にしておいた。
美しき花に名残を惜しみつつ、その場を後にしようと歩く足に力を込める。
その矢先――

「レイジェ・イルミオン様」

背後から俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。
そして、思わず振り返る。
振り返ってしまった。

危険な香り

目の前には金髪美人の女生徒。
やばいぞ。
どうする、俺。
俺はこの学校ではレイジ・アリーズだ。
それなのにレイジェ・イルミオンという言葉に振り返ってしまった。
レイジェと呼ばれただけなら『レイジと呼ばれたかと思ったよー、てへ』的な感じでやり過ごせたかもしれないが、ご丁寧に家名付きだった。
目の前の女生徒とは初対面なはず。
教師に就任してこの短期間で俺の正体がばれた？
心当たりがあるとすれば昨日の急患を治癒したことくらいだ。
しかし、治癒を行った医務室の1室には、たかぴー、おっちゃん、患者男性の3人しかいなかった。
とはいえ、あの3人の様子から3人が俺の治癒術の事を話したとも思えない。
別室にいた人間は、おっちゃんが主だって急患を治癒したと思うはずだ。
それがたとえ、この学校の治癒魔術師のレベルでは難しい状態だったとしても、考えられる可能性の中ではおっちゃんが頑張って治癒したというのが1番自然だからな。
ほかに俺の事がばれる要素があったか？
クリちゃん、ラージェ、ローザ、ロウ、ブルーが俺の事を話すなんてこともないだろう。
俺が中級魔術師ではないといった程度の噂なら、縫合魔術の授業に関わった生徒から流れることは考えられる。

しかし、所詮は俺がレイジェ・イルミオンだという確信を得られる情報ではない。

わからないな……。

とりあえず、この場をなんとか誤魔化して相手の出方を見るべきか。

これは苦しい戦いになりそうだぞ。

「おっと失礼。あなたのような美しい女性から名指しで呼ばれる男がどんな人物なのか気になって思わず振り返ってしまった。

この頑丈そうな鋼の肉体を持つ男が、あなたの呼ぶレイジェ・イルミオンかな？」

そう言って俺は、女生徒の正面に落ちていた少し大きめな石を手に取り何度か頷く。

「なるほど……。確かにいい面構えをしている。

あなたのような美しい女性に声を掛けられたというのにまったく動じない態度といい只者ではないな。

いやー、これほどの男ならあなたに名指しで呼ばれるのも納得だ。俺の完敗だよ。

敗者は潔く去るとしよう。さらば初恋、さらば美しき人、さらばレイジェ・イルミオン。末長くお幸せに」

道端の石をレイジェ・イルミオンに見立てた大胆な作戦だ。

俺がレイジェ・イルミオンではないと示唆した上で、この場から立ち去ることもできる。

まさに一石二鳥の策だ。

石だけに。

振り返り、立ち去ろうとする俺に女生徒が声を掛けてくる。
「どこへ行くんですか？　レイジェ・イルミオン様」
……っく！
誤魔化しきれなかったか？
再び女生徒の方を見て、
「ははは、俺はレイジだよ。レイジェ・イルミオンはそこに――！？」
あばばばば。
先ほどからレイジェ・イルミオンとなった俺の影武者の石が、粉々に砕かれて地面に散らばっていた。
「そこに？　どうかしましたか？」
動揺する俺に笑顔で女生徒が問い掛けてきた。
こいつはやばい。
この女生徒からは、関わってはいけないというオーラが漂っている。
「レイジェ・イルミオンがそこに居たと思ったんだけど、俺の気のせいだったようだよ。
まぁ、そう落ち込まなくても大丈夫さ。きっとこの世界のどこかでレイジェ・イルミオンは君を見ているよ。
それじゃあ俺は行くね」

早くこの場を去りたい。
そう思い、俺は女生徒に本日2回目の別れの挨拶を告げた。
しかし、女生徒は俺を帰してくれないようだ。
服の裾を軽く掴まれた。

「率直に聞きます。あなたはレイジェ・イルミオン様ですか？　別に誰かに話したりはしませんので安心してください。私はただ真実が知りたいだけです」

女生徒の声と表情から必死さが伝わってくる。
やはり俺の事は確信ではなかったようだが、これは興味本位とかそんなんじゃないな。
何か理由があるのだろう。
どうしたもんか。
『誰にも話さない』というのが本当だという確証はない。
それでも、妙に女生徒の言葉は真実味を帯びている。
この先、俺がレイジェ・イルミオンだという確証が得られるまで付き纏われるのも面倒だし、ばれるのも時間の問題な気がする。
ここは、はっきりとした証拠を見せて納得してもらう方がいいか。

「わかった。俺の負けだ。
俺がレイジェ・イルミオンで間違いない。ほら身分証もあるぞ」
レイジェ・イルミオンと書かれた身分証を懐から出して女生徒に見せる。

「興味本位で俺を探していたようには見えないが、何か目的でもあるのか？
見た感じ、誰かの敵討ちで俺を探していたとかじゃないよな」

英雄視されることもあるが、視点によっては俺はただの人殺しにもなる。
故に人に恨まれていてもおかしくない。
「やっと……やっと見つけました！　１３年間あなたを忘れた事は唯の１度もありません。
あの日私を救ってくれた事、今一度お礼をさせてください」
涙を瞳に浮かべながら目の前の女性が満面の笑みで俺の手を掴む。
そして、さぁ私の屋敷へと言いながら、女生徒が俺の手を引いてどこかへ行こうとする。
１３年前に目の前の女生徒を何かから助けたらしいということはわかったが、このまま屋敷に行くと激しく面倒なことが待ってる気がする。
「ちょっと待ってくれ。俺はあんたを――」
「シェルティナです。シェルティナ・メルディオール」
目の前の女生徒はシェルティナというらしい。
『あんた』という言葉に対し凄い速度で反応してきた。
なんか怖いのでちゃんと名前で呼ぼっと。
「俺はシェルティナを助けたことを覚えていないし、お礼とか気にしなくていいぞ。
そうだな、本当に俺の事を誰にも話さないでくれたらそれが１番ありがたいな」
加えて早く開放してくれると、さらにありがたい。
こんな美人と手を繋げるのは悪くないが、俺の危険察知能力が警

報を鳴らし続けている。

「そうですか、それでは屋敷へは後日改めて招待させてもらいますね」

いやいや、礼はいらないと言ったのになんで屋敷に招待なんだよ。

後日ならとか関係ないから。

俺が心の中で突っ込みを入れていると、シェルティナが俺の手を一際強く握ってくる。

「私、レイジ様と一緒に居られることをずっと夢見ていたんです。これからはずっと一緒ですね」

なんかスルーしてはいけない言葉が聞こえてきた気がするぞ。

「え？　なんだって？」

思わず俺は聞き返す。

俺の聞き間違いだと信じて。

「結婚式はいつ挙げますか？　と言ったんですよ」

あっれー？　さっき聞いた言葉と明らかに違う気がする。

気のせいかな。

「すまん、なんだって？」

もう1度聞き返してみることにした。

「子供は何人欲しいですか？　と言ったんですよ」

聞き返すたびに話の内容が飛躍している。
これ以上聞き返してはいけないことを俺は悟った。

「話を整理しよう。
まず俺はシェルティナと結婚するとも、ずっと一緒にいるとも言っていない。
ここまではいいか？」

「なら、今ここで言ってくれれば全て解決ですね」

解決してどうするんだよ。
色恋沙汰は得意ではない。
油断をすると後戻りできない展開に持っていかれそうだ。
大体、本気なのかはわからないが1度過去に命を救われたからといっては安易すぎる気がするぞ。
ここは断固否定の姿勢を崩すわけにはいかないな。

「シェルティナが俺の事を慕ってくれているのはわかった。
だが、残念。俺はこう見えて今年３６歳だ。シェルティナとはちょっと歳が離れ過ぎているな」

いやー、残念だー、と体全体を使って表現する。

「愛に年齢は関係ありませんよ」

まぁ、そうくるよな。
想定の範囲内だ。
ならこれでどうだ。

「俺実は女なんだよねー」
嘘だが心は不思議と痛まない。
「愛に性別は関係ありませんよ」
っち、なかなかヘビーな愛の持ち主だ。
この程度じゃ動じないか。
しょうがない、最終手段を使うか。
「俺実は人間じゃないんだよねー」
「愛に種族は関係ありませんよ」
「すまん、シェルティナ。お前の愛は俺には重過ぎる」
これで決まりだ。
可哀想だが中途半端に期待を持たせるのは残酷だからな。
「結婚にレイジ様の意思は関係ありませんよ」
「ねえのかよ！」
選択肢最初から俺にないじゃねえか。
思わず素で突っ込んでしまった。
しかし、なかなか俺好みの対応をしてくるな。
もしも立場が逆だったら、俺も似たような言葉を選んでしまいそうだ。
「ふふ、冗談です。私だって意中の人に愛されたい願望はあります

よ。
　今日は私の意思表示をしておきたかったんです。多少時間が掛かっても、いつか必ずレイジ様には私だけを見て貰えるように努力します。
　レイジ様に会えた時の事だけを考えて今まで自分を磨いてきたんです。今更後には引けませんし、引く気もありません。
　これからは宜しくお願いししますね。未来の旦那様」
　シェルティナが優しく微笑む。
　その姿に不覚にも俺は一瞬魅了されてしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6551y/

爪隠しの魔術教師

2011年11月30日23時43分発行